大東亜文学者大会をめぐる交渉の力学
── 内山完造の関わりと「二本建」論 ──

中村みどり

はじめに

内山完造（1885～1959）は，1913 年 3 月に参天堂の目薬行商の出張員として中国にわたって以来，1947 年 12 月に国民政府に日本へ強制送還されるまでの 30 年余を多国籍都市上海で過ごした。内山完造の名を妻みき（1893～1945）とともに「日中友好」の人士として歴史にとどめたのは，上海の虹口エリアに店を構え，日中の読書好きのサロンを兼ねていた内山書店の存在である。国籍の垣根を超えたさまざまな常連のなかでも，とりわけ自著の販売を委託し，国民政府の弾圧を避けて書店に身を潜めたことさえもある 4 歳年上の文豪魯迅一家と内山夫妻との親交はひろく知られている。

もっとも，内山完造が内山書店の店主として築いた人脈を駆使し，書店の存続に力を尽くしたのは，1936 年の魯迅の死去後，すなわち日中戦争と太平洋戦争の時期であったといえる。日本占領下の上海は，支那派遣軍報道部のもと言論統制が敷かれ，1940 年以降「和平救国」を唱える汪兆銘の南京国民政府の支配エリアに組み込まれた。しかし，水面下では抗日を掲げた蔣介石率いる重慶国民政府，延安を本拠地に抗日ゲリラ戦を展開する共産党政権との激しい対立がつづき，同時にまたこれらの各政権は複雑に結びついていた。乱世ともいうべき時代において，完造は軍部とは正面から衝突せず，書店経営を手堅く行う一方，憲兵隊に逮捕された魯迅夫人の許広平の救出にあたるなど[(1)]，旧知の中国側文化人の身も守っている。

近年では，呂慧君氏や高綱博文氏の論考で「日中友好」という平明な言葉だけでは括りきれない，戦時における内山完造の言動が注目されている[(2)]。本論ではこれらの流れを踏まえて，これまで丹念に論じられることのなかった，1944 年に南京で開催された第三回大東亜文学者大会への内山完造の関わりについて調べたい。主な資料としては，日本文学報国会の機関紙『文学報国』や戦時上海で刊行された日本語新聞『大陸新報』，日本語同人誌『上海文学』のほか，完造が戦時中に綴った「雑記」および日本帰国後に記した自伝『花甲録』などを用いる[(3)]。大東亜文学者大会の舞台裏での関係者たちの交渉に目を向けた上で，淪陥期上海における内山完造の経営者および土着派文化人としての姿勢について改めて考察することを試みる。

1. 第三回大東亜文学者大会の代表選定をめぐる交渉

戦後，日中双方の文学研究において，長い間論じることが半ば避けられてきた「大東亜文学者大会」は[(4)]，1940 年代当時，「大東亜共栄圏」の文学者たちの団結と「大東亜戦争」の遂行をかかげた一大文化イベントであった。ともに「日本文学報国会」が主催し，情報局が後ろ盾となった第一回大会は 1942 年 11 月 3 日から 10 日まで東京と大阪を会場として，第二回大会は 1943 年 8 月 25 日から 27 日ま

での期間に東京で開かれた。これに対して第三回大会は日本側の強い希望にもとづき，南京が開催地となる。汪兆銘を主席とする南京国民政府宣伝部の支援を得て，宣伝部顧問の草野心平が準備に関わり，南京に本部を置く「中日文化協会」の主催で 1944 年 11 月 12 日から 14 日までの会期で開催された。第一回大会と第二回大会は熱狂的な渦のなかで実施されたが，第三回大会開催時はサイパンおよびレイテ沖海戦での敗北が重なり，加えて日本本土や中国での日本占領地への空爆が激しくなり，すでに日本敗戦の気配が色濃く漂いはじめていた。また第二回大会以来，中国側の対日協力を不十分だとする不満の声が日本側から上がるなど[5]，第三回大会の準備はいくつかの壁に突き当たりながらすすめられることになった。

以下，日本文学報国会の機関誌『文学報国』（1943 年 8 月創刊～1945 年 4 月停刊）ならびに戦時上海で軍部資金により刊行された日本語新聞『大陸新報』（1939 年 1 月創刊～1945 年 9 月停刊）の大会関連記事をめぐりながら，第三回大会の開催準備の様子を見てみよう。『文学報国』第 13 号（1944 年 1 月 1 日）と第 14 号（同年 1 月 10 日）に連載された「満華文学界の動向　久米事務長の帰朝談」は，それぞれ「大東亜文学者大会次期開催地」，「使命を果たして」と見出しが付され，日本文学報国会理事で事務局長の久米正雄の中国訪問をくわしく報じている。この帰朝談によれば，久米正雄は 1943 年 11 月 15 日に北京に入り華北の作家たちとの懇談を経て，22 日に南京に到着し，午前に行われた南京国民政府の「宣伝会議」には間に合わなかったものの，それにつづく汪兆銘主催の茶会に参加した。宣伝会議には，のちにほぼ第三回大会の上海代表に選ばれる上海在住作家たちも出席しており[6]，その様子は「周化人，周越然，潘序租，魯風，柳雨生の諸君並びに関露女史などの外に元老格の陶晶孫氏も参会して居り，佐藤俊子女史も列席して居るといったような大体中華の代表的文化人を網羅した形」[7]と紹介されている。あくる日，久米正雄は中日文化協会の会館で開催された歓迎会で中国側文学者と交流したのち，宣伝部長林柏生に第三回大会の南京開催を申し入れて承諾を得た。その後 27 日に上海に移ると，同地でも歓迎会が開催されるが，ここで登場するのが内山完造の名前である。

> 内山書店の内山氏の好意により五大書局の歓迎宴では老大家の夏丏尊氏にも会い更に華文毎日改題（ママ），文友社主催の歓迎宴では別な文化雑誌会代表者にもお目にかかれて，上海の文化人諸氏の意向を一通り打診することが出来た[8]。

五大書局とは，当時上海の出版界を代表する商務印書館，中華書局，開明書店，大東書局，世界書局を指し，夏丏尊は内山完造と親交のあった開明書店の編集者である。完造の自伝『花申録』（1950 年脱稿，1960 年刊行）[9]の 1942 年の項には，太平洋戦争開戦後に上海の英米系書店や出版社が日本に接収され，また日本人経営の書店を統合した上海図書有限公司が創設された際，この五大書局と日本の三省堂や弘文堂が手を組んで「暗中飛躍」したことが記されている。このような動向とは一線を引き，「内山書店を守り出版一本で行こうと考えた」と自伝で綴っているが[10]，『文学報国』の記事からは，久米正雄の上海訪問の際，中国側書店との顔合わせの場を完造が設けていたことがうかがえる。もっとも，1920 年代に上海を訪れた谷崎潤一郎の案内をはじめとし[11]，以前より完造は日中の文化界をつなぐパイプ役をになってきた。『花甲録』でもまた，1930 年代に改造社社長の山本実彦の依頼に応じてバーナード・ショウらと魯迅の対談に改造社特派員を立ち会わせ，魯迅の文章が入手できるよう手配を整えたこと[12]，また朝日新聞主筆の原田譲二と魯迅を引き合わせる夕食会をみずから設定したことを記している[13]。戦時下だからではなく，戦前戦中を問わず，内山完造は交流の窓口でありつづけたと捉える方が妥当であろう。

さて，『文学報国』の記事によれば，1943 年末には第三回大東亜文学者大会の開催地は南京に決定していたことが確認できる。しかしながら，大会参加の日中両国の人選をめぐっては，1944 年に入って

からもさまざまな議論が交わされていた。例えば,『大陸新報』[14]に掲載された島田政雄「代表の検討」(1944 年 1 月 16 日)は,実際のところ,第二回大会までに招聘された中国代表は中国文学界の代表ではなく,第三回大会の代表選定をになう中国文学者協会も同様のメンバーから組織されることを上海文化界が危惧している,と述べている。そして,解決策として中国側の手で文学者協会を組織させ,同会が代表を推薦すべきだと主張していた。また同紙の識者へのインタビュー記事「大東亜文学への諸問題」(1944 年 2 月 20 日)のうちの一つ,陶晶孫「文学協会の発足」では,上海で「文学協会」が設立されたが,組織や民族文学再興の問題を解決しなければ東亜の文学を語るまでには至らない,と先を急ぐ日本側の姿勢に苦言を呈している。その上で,日ごろから中国文学に接している上海在住日本人文学者との協力が重要であることを主張していた。それにつづく杉本淳「文学者大会への道」は,これまで大会準備のため中国を訪問した日本人文学者のなかには人格破綻者さえもおり,中国側の失笑を買ったことを指摘し,日本側もまた真の代表を選ばなければならないことを力説している。そして,陶の意見に賛同し,上海在住の日本人文学者の実力が日本の職業作家に劣ることを擁護しつつ,第三回大会への彼らの招聘を求めていた。

最終的に第三回大会には,上海在住の日本人文学者が「来賓」として招かれた。これらの人選は陶晶孫や杉本淳などの主張にもとづく,第二回大会以降露わになった日中文学者の間に横たわる溝を埋めるための打開策であったと考えられる。そして後述する通り,上海在住の来賓リストには内山完造の名前が含まれることになるのである。

一方,中国側内部での代表候補の人選はさらに混迷をきわめていた。中国代表に選ばれた者たちの葛藤や韜晦については後日稿を改めて論じることとし,本稿では,第三回大会に上海代表として参加した陶晶孫と張若谷が大会前後に『大陸新報』の姉妹版である中国語新聞『新申報』(1937 年 10 月創刊〜1945 年 8 月停刊)[15]に発表した文章について触れておきたい。陶晶孫はかつて中国人留学生たちが日本で結成した文学団体「創造社」の作家であり,また内山書店の常連であったが,当時は中日文化協会上海分会の総幹事の要職を強いられ,第三回大会には上海代表として出席することになる。だが,大会前に『新申報』文芸欄に掲載した文章「期望文学者大会」(1944 年 10 月 19 日)では,第一回大会と第二回大会で代表候補となったが理由をつけて逃れたこと,第三回大会も候補となったが断る予定であることを語っていた[16]。また作家でジャーナリスト,かつ内山書店の顧客の張若谷は,大会終了後にやはり『新申報』文芸欄に掲載した「南京行脚」(1944 年 11 月 19 日)で,上海代表に選ばれた経緯について風刺を込めて記している。いわく,1944 年 9 月下旬にコーヒーショップで陶晶孫と草野心平に会い,大会代表の話を持ちかけられたが婉曲に断ったところ,10 月の新聞には代表として自分の名前が報じられているのを発見し狼狽した[17],という。

1943 年から 1944 年にかけて『文学報国』および『大陸新報』,『新申報』に掲載されたこれらの記事や文章は,第三回大東亜文学者大会準備の裏側では代表選出をめぐり,日本側は中国側のさらなる積極的な協力を求め,他方,中国側は自らの身を守るため,さまざまな交渉を重ねていたことを伝えている。それでは,日中文化人をつなぐ役割をにないつづけてきた内山完造は,大会そのものにどのように関わっていたのだろうか。

2. 大東亜文学者大会に関する「雑記」と『花甲録』の記述

まずは,内山完造自身が大東亜文学者大会についてどのように書き残しているのかを見てみたい。本章では,1940 年代の内山完造の「雑記」に記された「上海文化人番付表」に触れた上で,戦後の日本帰国後に筆を執った自伝『花甲録』を取り上げることとする。

近年,内山完造が上海で綴った 1944 年 6 月 5 日から 1946 年 10 月 5 日までの「雑記」が「内山完造

研究会」によって公開されたが[18]，同雑記の 1945 年 3 月 10 日付と 3 月 13 日付メモ書きの間に挟まれているのが「上海文化人番付表」[19]である。表自体には日付がない。上海在住の日中文化人の氏名を相撲の番付風に並べ，中国側を東に，日本側を西に分けている。具体的にその一部を取り上げると，「勧進元」＝東「陶晶孫」，西「小林秀雄」，「張出横綱」＝東「張資平」「傅彦長」，西「佐藤俊子」「草野心平」であり，東西の「張出横綱」の下にそれぞれ「老朽」の二文字が書かれている。そして肝心の「横綱」といえば，東「予且」（潘予且――引用者注），西「内山完造」と記されていた。第三回大東亜文学者大会開催のため事前に上海に派遣されたのが小林秀雄であり，中日文化協会上海分会の幹事で大会準備に携わっていたのが陶晶孫である。「勧進元」とは，おそらく第三回大会準備を舞台裏で取り仕切っていたことを指していると思われる。一方，「張出横綱」の張資平と傅彦長は第三回大会の上海代表であり[20]，張資平は陶晶孫とともに 1920 年代に創造社の作家として活躍し，傅彦長はかつて芸術雑誌を張若谷らと刊行し，内山書店の常連としても知られている[21]。佐藤俊子は明治期にデビューし，1910 年代に全盛をほこった作家で，当時は上海で中国語女性雑誌『女声』を編集しており，上海在住の来賓として第三回大会に参加した。そして草野心平は中国留学経験のある詩人であったが，学友林柏生とのつながりから南京政府宣伝部顧問として大会準備委員をつとめていた。張出横綱とは，番外編の横綱を指し，「老朽」はそれに通じる「年老いた役立たず」を意味する辛辣な言葉である。年齢を踏まえれば，草野心平はややそぐわないように思われるが[22]，完造は内心では彼らを過去の人物として捉えていたのだろう。横綱の地位に置かれた潘予且は第一回大会に中国代表として参加し，第二回大会で大東亜文学賞次賞を受賞した作家であった。

「上海文化人番付表」の顔ぶれは，明らかに第三回大東亜文学者大会に関わった，あるいは関わる可能性がきわめて高かった者たちである。番付表は，文学者としての優劣をランク付けしたというよりも，おそらく完造の胸中にあった各人の第三回大会への関与の度合いを示しているように考えられる。第三回大会を意識してであろう，大陸新報社が開催した座談会「遷都四周年記念鼎談会　中国文学の現状を語る」（『大陸新報』1944 年 4 月 8 日～9 日，11 日～14 日）には，内山完造，草野心平，陶晶孫の 3 名が参加している。同座談会では，中国文学者の消極的な姿勢を問題視する草野心平に対して陶晶孫は言葉少なく反論しているが，内山完造は中間的な立場に立ちながら，むしろ旧知の陶晶孫を擁護するような発言をしていた。張若谷が語った通り，陶が上海代表の選出に関わっていたのであれば，完造はその作業を手助けしていた可能性も否定できない。完造が番付表で自らを「横綱」として位置づけていたことは，大会開催のための日中文化界をつなぐ「顔役」としての自負の表れであったと捉えることができる。

さて，『雑記』は完造自身のための備忘録としての性質を有するが，他方，『花甲録』は公開を前提として日本帰国後の 1950 年に脱稿した自伝である。日本史年表をもとに生年 1885 年から完造が還暦を迎えた日本敗戦 1945 年までの出来事を執筆しており，松本和也氏の論考によれば，参照とした年表は大森金五郎・高橋昇造『最新日本歴史年表（増訂版）』（三省堂，1942 年）と史学会編『年表日本史提要』（山川出版社，1950 年）だという[23]。もっともこの三省堂と山川出版社版の年表には，大東亜文学者大会に関する記載はなく[24]，これに対して『花甲録』では，1942 年の年表に「十一月二日　大東亜文学者大会（東京？）」と加筆し，「追加事項」には大会に関する記述がある。また 1944 年の「追加事項」でも大会について言及している。以下，1942 年と 1944 年の該当する箇所をそれぞれ引いてみよう[25]。

> 大東亜文学者大会があった。中国側から誰れが行くかと思うて居ったところ私の知ってるような文学者の名は一人も出なかった。曰く周越全とか播予且とか，陶元徳とか柳雨生とか，婦人で関露とか云うような人で，その団長が周作人とか云うて全く驚いた顔ぶれであったが，また当然でもあった。そして柳雨生が日本で非常に歓迎されたとも聞いて居った。しかしそんなことは私には関係

のないことであった。一度興亜院の文化部からであったと思う，この大会に出席する文学者を紹介して呉れと云うことであったが，「折角ですが中国の文学者では名のある人で出席する人は一人もあるまいと思います」とお答えしたことがあったと思うが果してそうであった。（420 頁）

上海の在留日本人の思想団体を造ることを嘱託すると云う興亜院からの通知が来た。そして何日何時に発起人会があるから出席するようとのことであった。私はほんとに市井の一小売商人であって，そんなむずかしい思想団体を造るとか云うようなことは全く柄でないのである。一度興亜院文化部から中日文化協会を造るとかで，その民間発起人の中に加えられたことがあったが，とうとう失礼してしまったことがあった。それは大東亜文学者大会から招待されても出席しないのと同様，いささか自分と云うものを知ってその柄でないが故にであった。（477 頁）

記憶をたどって記した『花甲録』には間違いが散見され，上記引用の箇所でも中国側大会参加者の氏名に誤字があり，またその顔ぶれによれば 1942 年の第一回大会ではなく，1943 年に開催された第二回大会に当たることは，尾崎秀樹「大東亜文学者大会について」（1961 年）などで指摘されてきた[26]。ただし，手がかりとした日本史年表には記載のない大東亜文学者大会[27]を敢えて加えていることは，同大会について何かを書き残さねばならない，という強い思いを完造が抱えていたことを語っている。それはほかならず，『花甲録』に記されたように，大会には「招待されても出席」せず，日本軍部とは一定の距離を保ちながら，妻とともに内山書店を守りつづけた経営者および文化人としての矜持ではないかと考えられる。

前述の尾崎秀樹「大東亜文学者大会について」は，同大会の実相に迫った先駆的な論考であるが，日本側関係者がどのように中国に向き合ったかを論じる際に，「折角ですが中国の文学者では名のある人で出席する人は一人もあるまいと思います」という上記の『花甲録』の一文を引用している。そして，「これは，大東亜文学者大会が，鳴物入りでさわがれたが，少しも踊らず，結局のところ，雑魚同然の作家とも文学青年ともつかぬ連中をかきあつめて，日本のお手盛りで開催したことに対する皮肉として，痛快である」[28]と評し，「大会の虚妄を見抜いていた者」の一人として内山完造を捉えている。ただし気になるのは，同論文の末尾に置かれた注釈には，第三回大会来賓の中国在住日本人 5 名として「土方定一，池田克己，武田泰淳，佐藤俊子，内山完造」[29]と記していることである。完造が来賓であったという事実は論文のなかでは触れていない。この大会来賓であったことと「招待されても出席し」なかったという自伝の語り，そして「大会の虚妄を見抜いていた」という尾崎の完造への高い評価はどのように併せて受けとめればよいのであろうか。

『花甲録』を脱稿した 1950 年当時，大会関係者の多くは存命しており，「招待されても出席しない」という内山完造の言葉に虚りはないように思われる。完造の第三回大会への招待と参加の有無をめぐっては，次章で同時代の記録を用いながらくわしく検討したい。

3. 第三回大東亜文学者大会との関わり ── 同時代の記録『上海文学』『文学報国』『渡支日記』から

第三回大会大東亜文学者大会の直前である 1944 年 11 月 10 日の『大陸新報』の記事「文学者大会各国代表決る」には，日本代表につづく「列席者」として「内山完造，佐藤俊子，土方定一，石上玄一郎，武田泰淳，池田克巳」6 名の名が記されていた。また同大会終了後，完造の大会参加あるいは招待について報じた同時代の文章は，現時点では 2 種類の新聞雑誌で確認することができる。一つは，上海在住の日本人文学愛好者がつどい，内山完造が会長をつとめた上海文学研究会の同人雑誌『上海文学』

（1943 年 4 月創刊～1945 年 5 月停刊）第 4 号「秋冬作品」（1944 年 12 月）である[30]。同号「編集記」では，大会への上海関係の参加者について次のように紹介していた。

> 同人の内山完造，池田克己，武田泰淳及び佐藤俊子，石上玄一郎の諸氏が文学者大会に出席した。現地在留日本側文学者として内地側文学者に為し得ない，相互理解のためのよい役割を果して来ることと思うのである[31]。

もう一つは，『文学報国』第 43 号（1945 年 1 月 1 日）に掲載された「第三回大東亜文学者大会報告」である。同報告の末尾には以下のように記されている。

> なお本大会には日本代表以外に，左の諸氏が来賓として招請せられたり。
> 土方定一（北京在住文報詩部会員・華北総合調査研究所員）池田克巳（上海在住詩部会員・新申報□□局勤務）武田泰淳（上海在住外国文学部会員・東方文化編訳館在勤）佐藤俊子（上海在住小説部会員・女声主幹）内山完造（上海在住・内山書店主）以上[32]。

一見すると，上記二つの記録は内山完造の第三回大会参加を証明するかのように思われる。しかしながら，各記述の詳細をたどると，いくつかの矛盾があることに気づく。まず，『上海文学』「秋冬作品」の発行日付は 1944 年 12 月 5 日であるにもかかわらず[33]，「編集記」には現地参加者が「これから」大会で果たすべき役割への期待が綴られている。「編集記」の前に置かれた「上海文化消息」欄でも，「第三次大東亜文学者大会は十一月十二日十三日，十四日の三日間南京に於いて開催される」[34]と述べた上で，「現地邦人作家」の「来賓」の一人として内山完造の名を記しており，やはり「これから」大会が開催されることを報じている。奥付によれば，同号の「印刷納本」は 1944 年 11 月 15 日であるが[35]，この日付から考察すると印刷は 11 月 15 日より前に行われ，「編集記」の原稿はさらにそれ以前，すなわち 11 月 12 日の大会開始前に執筆された可能性がきわめて高い。また『文学報国』掲載の「第三回大東亜文学者大会報告」では，「招待された」という表現にとどまり「参加した」とは記されていない。そのほか同報告では，北京在住の土方定一の名前が加わった代わりに，上海来賓として同じく中日文化協会上海分会に所属する武田泰淳とともに大会に参加した石上玄一郎の名が抜け落ちていることが指摘される。これらのことを踏まえると，『上海文学』「秋冬作品」の「編集記」と『文学報国』の「第三回大東亜文学者大会報告」における完造の大会出席についての情報は，大会当日の状況とは必ずしも一致しておらず，内山完造の大会参加の証拠とはならないのである。

つづいて，やはり同時代の記録として，第三回大会に日本代表として参加した高見順の「渡支日記」（1966 年刊行）[36]を見てみよう。第三回大会準備に関わる小林秀雄から中国行きを打診された高見は，「対敵宣伝」のため情報局派遣で 1944 年 6 月下旬に南京に到着し，11 月より前に上海に移動している。以下，やや長文となるが，上海入り以降の日記から内山完造と関わりのある個所を抜粋したい[37]。

> 十一月七日
> 池田君（池田克己――引用者注）との約束で，同君に会うべく，北四川路の電車の終点の内山書店へ行く。十時の約束。（837 頁）

> 内山書店へ行くと，池田君がさきに来ている。内山氏が正午メトロポール・ホテルの長与氏（長与善郎――引用者注）の部屋へこないかという。（839 頁）

景林盧の門屋公館へ行き，小林秀雄（註＝当時，上海に滞在中）に会う。
上海から大会へ行く来賓五名（佐藤俊子，池田克己，石上玄一郎，武田泰淳，内山完造）の費用のことだが，はじめは代表と同じく宣伝部でもつと草野心平（註＝当時，中国に居住）がいっていたが，池田君のところへ電報がきて，自弁とすることになった。自弁では佐藤さんなどは行けないという。石上・武田両君も，あるいは文協で持ってくれるだろうが，林広吉氏がつむじをまげているので，むずかしい（内山氏が来賓に加えられたので，林君はそれなら自分も加えてもよかろうと気を悪くしているらしい。それで石上君に，大会に行くことはないといい，石上君たちは弱って草野あてに，林，小竹（小竹文夫――引用者注）両氏も来賓として呼んでほしいという電報を打ったという）。
自分は池田君と相談して，十万元ほど金を作って来賓たちに分けようということにした。
（839～840 頁）

長与氏と二人で，内山氏の三輪車に乗って，大使館へ行く。雨さかんなり。（841 頁）

十一月八日
ふたたび大陸新報社へ行き，池田君と中日文協へ行く。
武田，石上両君に，池田君から金を渡す。

ともにパーク・ホテルに行く。
中華日報社の招宴，二階の孔雀庁。
日本側は長与，阿部（知二――引用者注），小林，内山完造，自分。（842 頁）

上記の日記には，内山完造が上海在住の大会来賓に決定したことのほか，南京での第三回大会出席のために上海に到着した高見順や日本代表団長の長与善郎の面倒をかいがいしく見るなど，例のごとく，中国文化界との橋渡し役をになっていた姿が記録されている。なお，高見順の日記に記された上海在住の来賓 5 名の氏名は，前出の『上海文学』「秋冬作品」の「編集記」の紹介と重なる。中華日報社の招宴に日本代表の文学者たちと並んで内山完造が出席したことは，彼が大会準備に当たり欠かせない人物であったことを物語っていよう。なかでも完造が来賓に選ばれたことに中日文化協会上海分会事務局参与の林広吉が腹を立て，同協会所属の若手作家であった石上玄一郎と武田泰淳の南京行きが危うくなった，という舞台裏のエピソードは興味深い[38]。池田克己，石上玄一郎，武田泰淳とともに完造は上海文学研究会のメンバーであり，かつ同研究会の会長をつとめていたが，前章で紹介した通り，第三回大会開催に際し，中国文学を理解する現地在住の日本人文学者の出席を求めるという陶晶孫らの強い要望があった。完造たちの大会への招待は，これらの声に応じたものとして捉えられるが，もっとも日本代表とまではならず，ゲスト枠にとどめられたのであった。つづいて，高見たち一行が上海から南京に移動した後の日記を追ってみよう。

十一月十一日
火野葦平来着，火野と同室のはずだったが，池田君にいてもらう。

陶晶孫が宣伝部と相談して小竹教授に参会の電報を打ったという。これで石上君は来れるわけだが，――どうでもいい。（849 頁）

十一月十二日
中山陵に至る。今日は孫文先生生誕慶祝日。式が行われるのである。

帰途につく。途中，武田泰淳，石上玄一郎に会う。（850～851 頁）

佐藤俊子女史到着。（853 頁）

十一月十六日
駅へ急ぐ。三時上海へ向け出発。
夕刻，上海着。
日本代表はパレス・ホテルへ，中国代表はキャセイ・ホテル。（861 頁）

十一月十七日
宿酔。
空襲警報。

警報下を出て，内山書店に行く。挨拶。（862 頁）

上記の引用箇所からは，旅費の自己負担が難しかった佐藤俊子のほか，内山完造招待の問題で参加が阻まれた武田泰淳と石上玄一郎は，最終的には旅費が工面され，また宣伝部が小竹文夫を来賓に加えたことにより，無事に南京に到着していたことがうかがえる。また池田克己は南京の宿泊先で高見順と同室であった。すなわち，「渡支日記」に記された来賓 5 名のうち 4 名は大会開催地の南京に行ったことが確認できる。これに対して，肝心の内山完造の名は一度も登場しない。そして大会終了後，関係者一行と参観した蘇州から上海に戻った高見順は，その翌日に前夜の宴会の酔いが残るなか，加えて空襲警報が鳴り響くなかを内山書店まで挨拶に出向いている。

これらのことを併せて考えると，内山完造は来賓として招待されたものの，やはり南京で開催された第三回大東亜文学者大会には参加せず，だからこそ上海で彼の世話になった高見は，大会終了の報告と礼を述べるために内山書店を表敬訪問したのではないか，そう推測することができる。すなわち高見順の「渡支日記」からは，内山完造は第三回大会に来賓として招待され，また大会開催のため日中文化人の顔をつなぐ役割を果たしていたことが確認できる。ただし大会出席の有無については，むしろ同日記は，内山完造は不参加であったことを間接的に語っていると考えられるのだ[39]。

ふたたび『文学報国』掲載の「第三回大東亜文学者大会報告」に戻れば，そこには来賓 5 名の氏名のなかに，高見順の日記で南京到着が確認できた石上玄一郎の名前がなかった。そもそも同報告では，日本代表と「満洲国」代表は全員その氏名が記されているのに対して，中国代表については，「華北代表　銭稲孫・柳龍光以下二十一名」「華中代表　陶晶孫・柳雨生以下二十五名」とのみ記され，参加者の氏名の記載が大幅に省略されている。これはおそらく単なる紙幅の関係ではなく，最終的に誰が参加し誰が不参加であったのか，日本側が把握し切れていなかったことを示しているのではないだろうか。報道内容と現場がずれていた例として，大会前 11 月 10 日の『大陸新報』の報道「文学者大会各国代表決る」では，上海代表のなかに張資平の名が含まれているが，結局彼は大会を欠席したことが挙げられる。また大会当日 11 月 12 日の『大陸新報』では，宣伝部が直前に電報を打った小竹文夫が大会に出席し，翻訳問題について述べると報じていたが[40]，実際のところ，小竹もまた大会に参加しなかった。

第一章で見てきたように，さまざまな問題で第三回大会開催直前まで参加者の出席は確定せず，また

大会主催側の南京政府は汪兆銘急逝後の対応に追われ，混乱に見舞われていた[41]。『花甲録』の記述により，内山完造は第三回大会に欠席したと考察した竹松良明氏は，来賓のなかで内山完造だけが日本文学報国会の会員ではなかったため，大会欠席の自由があったのではないかと推測を加えている[42]。「第三回大東亜文学者大会報告」では，池田克巳は「日本文学報国会詩部会員」，武田泰淳は「外国文学部会員」，佐藤俊子は「小説部会員」の肩書が明記されており，また石上玄一郎は小説部会員であったことが確認できる[43]。これに対して，完造の肩書きは「内山書店主」一つであった。

第三回大東亜文学者大会は，日本敗戦の気配を感じつつ，日中文学者の間に横たわる溝を埋められないわだかまりを抱えたまま準備がすすめられ，追いうちをかけるかのように大会開催二日前に汪兆銘が急逝し，南京政府内部が騒然とするなかで開催された。来賓に選出されたものの，1944 年夏には戦争終了後を見すえて夫婦での蘇州移住と新たな文化事業を計画していた内山完造は[44]おそらく大会出席には利点を見出さず，混乱にまぎれて出席しなかったと考えられるのだ。第三回大会の翌年，内山完造は上海で還暦を迎え，その直後に病をわずらっていた妻みきの最後を看取る。そして日本は敗戦を迎えることになる。

4. 中国社会から学んだ「二本建」論

第三回大東亜文学者大会に来賓として招待され，当時はまだ 30 代はじめの若手作家であった武田泰淳は，晩年に遺稿となる上海を舞台とした自伝的小説『上海の蛍』（1976 年）を残している。同作品では大会参加をめぐる会話のなかで，内山完造の身の処し方について登場人物たちに次のように語らせていた。なお「O 博士」のモデルは小竹文夫，「私」は武田泰淳の分身である。

> O 博士が私を呼んで相談した。
> 「大東亜文学者大会なんか，私は少しも興味がありませんよ。しかし，私のところへは招待がきました。老板（ロウベイ）のところにもきたらしい。内山老人は，もちろん出席するはずはないがね」「そうですね。魯迅の死ぬときも，葬儀の日に立ち会った人ですからね。大会には鼻もひっかけるはずがありませんね」[45]

『上海の蛍』は 30 年前の作者の上海在住の体験を題材としたフィクションであり，そのエピソードの多くは高見順の「渡支日記」を踏まえていると思われる。また上記の内山完造に対する「私」の見方には，武田泰淳の文豪魯迅に対する畏敬の念が重なっているように見うけられる。だが，同じ時期の上海文化界の空気を吸い，第三回大会に出席した武田泰淳の筆であれば，「大会には鼻もひっかけるはずがない」という完造像は，やはり当時彼が周辺に与えていた印象を映したものであろう。ただし，本稿で関連資料をたどってきた通り，淪陥期上海の内山完造について語るには，第三回大会は欠席したとしても大会準備には関わった姿もまた視野に収めるべきであるのだ。

『大陸新報』に掲載された内山完造の文章は 153 篇，さらに前述の大陸新報社主催の「遷都四周年記念鼎談会　中国文学の現状を語る」を含めて，同社が催した 5 回の座談会に参加しているという[46]。ただし 1944 年は上記の 4 月の座談会をのぞき，ほかは「小売税に就いて」（1944 年 2 月 7 日），「現地出版に就いて」（1944 年 3 月 11 日）など漢方薬の知識や商業に関する経済観念についてもっぱら記し，とくに第三回大会前後には，大会や中国文学に触れる文章をいっさい発表していない。大会準備では日中文化人をつなぐ内山書店の店主として可能な範囲で協力するが，それ以上の関わりを避けた内山完造の判断は，『上海文学』創刊号にあたる「春季作品」（1943 年 4 月）に掲載された日中比較文化論「魯迅先生の丙午」や『花甲録』の次のような言葉からもうかがえる。

一切万事を二本建で行く支那人は何んと云っても世界の苦労人である。アノ危険視される相場（投機）さえも何日も二本建でやって居る。大怪我の少ないワケと危険な相場も案外安全なボロ儲口に考えられる理由もよく解る，相場を危険視して近づくことさえ止め様としながらワザワザ危険な一本建でやって行く吾々日本人には此れもよい参考になる様に思われるガドウか[47]。

南京に新国民政府が出来た。主席は汪精衛であると云う。これは蔣介石と並んで国民政府中の巨頭である人だ。その人が日本と云う中国の敵と提携して和平政策の新国民政府を設立した。日本人には考えられないことである。しかしこれが中国が四千年の歴史を依然独立国家として今日に生きて来ている秘訣中の秘訣であると私は考えるのである。（中略）即ち中国はこれでチャンと二つに分かれたのである。中庸は不冷不熱である，不上不下である。しかしこれは冷と熱とに上と下とに分かれたのである[48]。

そのほか，1946年の「雑記」のなかでも「二本建」というタイトルを付けた短文をはじめとし，日本のように「一本調子」であることの危険性を語り，国共内戦における中国の二面性を戦術として重ねて評価している[49]。内山完造はくりかえし，歴史的経験をもとに二項対立のいずれかに付くのではなく，各方面に可能性を託して生きのびる中国の人びとの知恵とたくましさへの驚きと賞賛を述べてきた。大東亜文学者大会に関して，内山完造は完全に扉を閉ざしていた訳ではない。日中に跨る幅広いコネクションをもっていた完造は大会開催のために得意とする場面では協力し，他方ではそれ以上介入するのを避けていた。これはまさに彼が中国社会から学んだ「二本建」の生き方にほかならない。そして，このような中国社会に根づいた感覚を備えていたからこそ，内山書店は日中いずれもの顧客を抱え，日本敗戦まで長らえたといえよう。

完造と親交があった魯迅は，現代中国を代表する知識人であるが，同時にまたシビアな経済観念の持ち主であったことも知られている。自著の編集のほか，時には弁護人を立てて原稿料や印税の交渉も行い，上海での魯迅一家の収入の多くは安定した印税で支えられていたという[50]。『花甲録』によれば，内山書店は魯迅の作品集3冊と魯迅編著の木版画集4冊の総代理店をつとめ，瞿秋白の記念集など2冊の刊行に関わり，さらに魯迅作品集など5冊の代理販売を行っていた[51]。互いのなかに人間としての誠実さを認めあっていた魯迅と完造の家族ぐるみの親交であるが，それは商売における顧客と書店主の信頼関係の上に成り立っていたと捉えられる。

「あの時代のあれだけの重圧感のもとで，市民の立場を貫いたことは立派だったと思うんです。あの上海の混乱の中で市民として生き抜くのは，私のように月給をもらって生きていた者からみれば，それがどんなに大変なことだったか，よくわかります」[52]と，書店常連であった中国研究者の幼方直吉は戦時上海の内山完造について語っている。第三回大東亜文学者大会との内山完造の関わり方は，淪陥期上海の言論統制の重圧のなかを現地の中国文化人とともに「二本建」で生き抜いた，経営者および土着派文化人としての彼の姿勢を示しているのである。

注

（1）内山完造「当時の思い出」（許広平『暗い夜の記憶』安藤彦太郎訳，岩波新書，1955年）による。

（2）呂慧君「日中友好の〈媒介者〉内山完造の文学・文化活動に関する多元的研究」（関西学院大学博士学位論文，2013年），高綱博文「戦時上海における内山完造――内山完造の〈グレーゾーン〉問題を中心に」（『研究紀要』第33号，2020年3月）。

（3）以下，本稿で各資料を引用する際は当用漢字，現代仮名遣いを用いる。

（4）先駆的な論考として尾崎秀樹「大東亜文学者大会について」（『文学』1961年5月号掲載，『近代文学の傷痕』岩波書店，1991年所収）があり，近年では松本和也『太平洋戦争開戦後の文学場　思想戦／社会性／大

東亜共栄圏』神奈川大学出版会，2020 年）がある。本稿での「大東亜文学者大会について」の引用は，『近代文学の傷痕』による。

（5）第二回大会で「和平地区にある反動的老大家」の「粉砕」を唱えた片岡鉄兵の演説（『文学報国』第 3 号，1943 年 9 月）は大きな反響をよんだ。

（6）魯風は第二回大会には参加したが，第三回大会には参加していない。

（7）『文学報国』第 14 号，復刻版（不二出版，1990 年）49 頁。

（8）同上。

（9）『花甲録』（岩波書店，1960 年），東洋文庫版『花甲録 ── 日中友好の架け橋』（平凡社，2011 年）。本稿での『花甲録』の引用は東洋文庫版による。

（10）前掲，『花甲録』424～425 頁。

（11）「上海交遊記」（千葉俊二編『谷崎潤一郎　上海交遊記』みすず書房，2004 年）による。

（12）前掲，『花甲録』1933 年の項，309 頁。

（13）同上，1938 年の項，371 頁。

（14）本稿では，『大陸新報』はマイクロフィルム版（ゆまに書房，2009 年）などを参照した。

（15）本稿では，『新申報』は中国国家図書館所蔵のマイクロフィルム版を参照した。

（16）陶晶孫「期望文学者大会」（「千葉文芸」第 41 期，『新申報』1944 年 10 月 19 日）。同文については，拙論「日本占領下上海における陶晶孫の言説 ── 大東亜文学者大会と「老作家」・「狗」」（『野草』第 102 号，中国文芸研究会，2019 年 3 月）を参照されたい。

（17）張大公「南京行脚　四　代表一行」（「千葉文芸」第 46 期，『新申報』1944 年 11 月 19 日）。張大公は張若谷の筆名である。

（18）「内山完造　1944 年 6 月 5 日から 46 年 8 月 17 日までの雑記」（『人文学研究所報』第 64 号，2020 年 9 月），「内山完造雑記 1944 年 8 月 18 日から 46 年 10 月 5 日」（『人文学研究所報』第 65 号，2021 年 3 月）。

（19）前掲，『人文学研究所報』第 65 号，28 頁。

（20）最終的に張資平は第三回大会に出席していない。

（21）盧敏芝「1927 年的上海文壇作為中，日文化沙龍 ── 従田漢，内山完造，傅彦長与三張照片説起」（本稿執筆時点では未発表原稿）による。同論考のデータは内山籬氏からいただき，またこのことは論者の許可も得ている。

（22）張資平は 1893 年生まれ，傅彦長は 1891 年生まれ，佐藤俊子は 1884 年生まれで 1945 年 4 月に上海で客死した。草野心平は 1903 年生まれである。

（23）松本和也「内山完造『花甲録』の書法」（前掲，『人文学研究所報』第 65 号）140 頁。ただし，国立国家図書館デジタルコレクションで公開されている大森金五郎・高橋昇造『最新日本歴史年表（増訂版）』（三省堂，1945 年）を筆者が確認したところ，この 1945 年版も 1942 年以降の年表は空白となっていた。このため，内山完造が参照したのは 1942 年版とは限らず，1945 年までの間に刊行された同書だと考えられる。

（24）筆者が確認したのは，いずれも国立国会図書館デジタルコレクションの『最新日本歴史年表（増訂版）』（1945 年）と『年表日本史提要』（1950 年）である。

（25）本稿での『花甲録』の引用の頁数はいずれも前掲，東洋文庫版による。引用にあたり，とりわけ内山完造の動向に関わる箇所には下線をひいた。

（26）前掲，尾崎秀樹「大東亜文学者大会について」38 頁。

（27）『年表日本史表提要』の 1942 年 11 月の欄には「大東亜省設置」の出来事が記されており，そこから「大東亜文学者大会」を想起した可能性がある。

（28）前掲，尾崎秀樹「大東亜文学者大会について」38～39 頁。

（29）同上，注 22，51 頁。出典は記されていないが，来賓 5 名の氏名とその順番からして，後述の「第三回大東亜文学者大会報告」（『文学報国』第 43 号）によると考えられる。

（30）前掲，呂慧君「日中友好の〈媒介者〉内山完造の文学・文化活動に関する多元的研究」166 頁。『上海文学』の販売所は内山書店で，発行元は当初上海文学研究会であったが，第 3 号から大陸新報社へ変わった。『上海文学』については，趙夢雲「『上海文学』解題」（『戦前期中国関係雑誌細目集覧』三人社，2018 年）が詳しい。

（31）『上海文学』秋冬号（1944 年 12 月）96 頁。筆者が確認したのは，日本近代文学館所蔵の『上海文学』「秋

冬号」と後述の創刊号にあたる「春季作品」である。
(32) 前掲,『文学報国』107 頁。□□は文字が潰れて解読不明な文字である。
(33) 前掲,『上海文学』秋冬号, 96 頁。
(34) 同上, 94 頁。なお同消息欄では奥野信太郎も「現地邦人作家」として括られている。
(35) 同上, 96 頁。
(36)『高見順日記』第二巻下(勁草書房, 1966 年)。
(37) 本稿での「渡支日記」の引用と頁数はいずれも前掲,『高見順日記』による。引用にあたり, とりわけ内山完造の動向に関わる箇所には下線をひいた。なお日付の次行からの抜粋でない場合も, 日付との間に「中略」とは記さないこととする。
(38) 林広吉らの肩書は, 大橋毅彦・趙夢雲・竹松良明・山﨑眞紀子・松本陽子・木田隆文編著・注釈『上海 1944–1945　武田泰淳『上海の螢』注釈』(双文社出版, 2008 年) を参照した。
(39) 前掲,「内山完造　1944 年 6 月 5 日から 8 月 17 日までの雑記」24 頁によれば, 大会前日の 11 月 11 日は妻みきの誕生日であり, 上海で赤飯を炊いて祝っている。また同日上海は空襲に見舞われたという。
(40)「文学者大会に小竹教授出席」(『大陸新報』1944 年 11 月 12 日)。
(41) 高見順の「渡支日記」は, 大会前夜の茶会や宴会に主催者である南京政府要人が欠席したことを記している。
(42) 竹松良明「大東亜文学者大会が南京で開催される」(前掲『上海 1944–1945 武田泰淳『上海の螢』注釈』95 頁)。日本文学報国会会員に関する考察については, 竹松氏より 2021 年 10 月 19 日付のメールでご教示いただいた。ここに記して感謝の意を表したい。
(43) 社団法人日本文学報国会『会員名簿(昭和十八年度)』(復刻版, 新評論, 1992 年)。1943 年の時点では会員のなかに佐藤俊子の氏名はない。会員名簿の存在は, 竹松良明氏にご教示いただいた。
(44) 1944 年 7 月 14 日付の雑記には, 戦争終了後に中国大陸で日本の文化を残すため, 蘇州で小規模な図書館を内山夫妻で開くという希望が記されていた。前掲,「内山完造　1944 年 6 月 5 日から 8 月 17 日までの雑記」119 頁。
(45)『上海の螢』(中央公論社, 1976 年初版, 1977 年再版) 126 頁。
(46) 前掲, 呂慧君「日中友好の〈媒介者〉内山完造の文学・文化活動に関する多元的研究」163 頁。
(47)『上海文学』春季作品 (1943 年 4 月) 24 頁。
(48) 前掲,『花甲録』410～411 頁。
(49) 前掲,「内山完造　1944 年 6 月 5 日から 46 年 8 月 17 日までの雑記」74 頁。
(50) 王暁漁『知識分子的“内戦”――現代上海的文化場域 (1927–1930)』(上海人民出版社, 2007 年) 129, 133～134 頁。
(51) 前掲,『花甲録』342 頁。
(52) 幼方直吉「魯迅の墓から思い出すこと」(『季刊　鄔其山〔特集〕内山書店と内山完造』1985 年 9 月号) 47 頁。